学生野球の父
—飛田穂洲の足跡—

The father of Students Baseball
—The Footprint of Suishu TOBITA—

ネットワーク情報学部　佐竹　弘靖

School of Network and Information　Hiroyasu SATAKE

Keywords: Suishu TOBITA, students baseball, Tokyo Big 6 Baseball League

Abstract

This article introduces the footprint for in college student days and manager at Waseda University baseball club era from infancy of Suishu TOBITA who let students baseball root in Japan.

はじめに

2020 年度東京六大学野球秋季リーグは勝者が優勝となるリーグ最終戦の早慶 2 回戦にもつれ込み、早稲田が逆転勝ちをおさめ 10 年ぶり 46 度目の優勝を飾った。

両チームあわせて 14 投手を投入する総力戦。8 回まで慶応大学が 2ー1 と 1 点リード。9 回表の早稲田大学の攻撃。2 アウトに追い込まれたがランナー1 塁。8 番中堅手の蛭間選手が初球の変化球をものの見事に捉え、バックスクリーンに飛び込む逆転 2 ラン。8 回途中からマウンドに上がった楽天ドラフト 1 位指名の早稲田のエース早川投手が 9 回も 0 点で抑え、早稲田大学が見事な逆転勝利で優勝をもぎとった。

2020 年は東京六大学野球にかぎらず全てのスポーツが、新型コロナウイルスの影響で試合はもちろん、練習さえできない状況が続いた。

そのような状況下、東京六大学野球は全国 26 連盟で唯一、春季リーグ戦をやり遂げた。本来なら 4 月から 5 月末に開催されるはずが、8 月開催に延期。1 試合総当たりで日程短縮、応援団なしと異例ずくめの戦いであった。優勝校は法政大学。連盟独自の新型コロナウイルス対策のガイドラインを作成し、感染者を出すことなく閉幕。この時期に開催したのは東京六大学野球だけで、秋に向けて他の大学連盟へのモデルケースとなった。日本学生野球のけん引役として見事にその役割を果たしくれた。

そして秋季リーグである。

春季リーグ閉幕から、わずか 1 ヶ月の 9 月 19 日開幕。2 回戦総当たりで、勝ち点制ではなく勝率制で優勝を争った。

結果は、優勝早稲田、準優勝慶応、3 位明治以下立教、法政、東大と続く。

ところで、東京六大学野球の最終カードは早稲田対慶応と決められているのはご存知だろうか。さらに早慶戦に限り全試合慶応が 3 塁側で早稲田が 1 塁側と決められている。東京六大学野球にとって早慶戦は特別なのだ。

その理由の詳細は、おいおい話していくことになるが、東京六大学野球は 1903（明治 36）年の早稲田対慶応の 1 戦が始まりであり、その後順に明治、法政、立教と試合に参加するようになり、1925（大正 14）年に東京帝国大学（現在の東京大学）の加盟が決定すると、東京六大学野球連盟が発足。かくして「東京六大学」が誕生したのである。

さて、10 年ぶり 46 度目の優勝を飾った早稲田大学硬式野球部。優勝を決定づけた蛭間選手のホームランは、まさに「一球入魂」の一打であった。

大学野球ファンならずとも「一球入魂」の言葉は誰もが知っているに違いない。早稲田大学硬式野球部初代監督飛田穂洲（忠順）が野球に取り組む姿勢を表した言葉である。飛田氏がいなければ早稲田大学野球部の今の姿は無かったといっても過言ではなかろう。

「学生野球の父」飛田穂洲（忠順）氏の足跡を追い

かけてみたい。

その前に、日本の野球がどのように普及し、今日に受け継がれていったのかを記そう。

野球が日本に伝播した背景には 1835（嘉永 6）年のペリーが「黒船」で浦賀にやってきて、アメリカの海軍力という現実を幕府に突き付けたことが挙げられる。現実を目の当たりにした我が国は、将軍から天皇に政権を戻すという、いわゆる「王政復古（明治維新）」の一端として、日本の指導者たちは一連の近代化政策に乗り出すのである。

そこには教育制度の抜本的改革も含まれていた。そこで出されたのが 1872（明治 5）年、明治天皇が近代日本の教育の基本方針として下した「教育勅語」である。ただ、この勅語には「体育」に関する文言がどこにも見当たらない。そこからは当時、日本帝国の政府要人や関係者たちは「体育」について知識はなかったわけではなかろうが、全く不必要なものとの共通認識があったことが伺える。

しかし、近代日本の礎を築くために雇用された外国人教師たちは、教育システムを確立するためには、スポーツの役割は極めて大きいものとそれぞれ独自の考えのもと、普及に勤しんだのである。

そのような状況下、1871（明治 4）年からお雇い外国人として来日した英語教師ホーラス・ウイルソン（Horace Wilson;1843 年 3 月 10 日―1927 年 3 月 4 日）が、1873（明治 6）年に開成学校（現在の東京大学）でベースボールを紹介した。

ところで、近代化を急速に進める必要があった当時の日本で注目されていた産業のひとつが交通手段である。海外からの技術を輸入し、出来るだけ早く交通網を充実させなければならない。そこに目をつけた一人の人物がいた。

平岡熙その人である。

彼は 1871（明治 4）年アメリカのボストンに自費留学したが、中退して機関車工場に工員として働き、機関車・機械類製造技術を修得し、1876（明治 9）年に帰国する。平岡氏は現地で本場のベースボールに興味を持ち実際にプレーを経験している。また、レッド・ソックスのファンでもあった彼は帰国後、野球チーム結成を計画し、1878（明治 11）年、新橋停車場構内に日本初の野球場である「保健場」を作り、アメリカのスポルディング社から用具の提供を受けたり、ユニフォームを作るなどして日本初の本格的野球チーム「新橋アスレチック倶楽部」を組織した。1888（明治 21）年には、アメリカ帰りの岩田伸太郎が入部する。岩田氏はアメリカ領事の息子で本場でプレーの経験もある。岩田氏を中心に倶楽部はにわかに活性化したという。

平岡氏が新橋アスレチック倶楽部を設立した 8 年後の 1886（明治 19）年に日本の近代国家建設のために必要な人材の育成を目的として第一高等学校（現在の東京大学教養学部および、千葉大学医学部、同薬学部の前身となった旧制高等学校。「旧制一高」とも呼ばれる）が設立された。いわゆる一高ではベースボールが盛んに行われて、アメリカ人中心の横浜アスレティック・クラブを 29 対 4 の大差で破るなどその勢いは盛んで「一高時代」を築き、我が国のベースボール・ブームの火付け役となったのである。

ちなみに、ベースボールを「野球」と訳したのは、中馬庚（1870 年 3 月 10 日―1932 年）3 月 21 日）が、1895（明治 28）年に書いた「第一高等学校野球部史」が最初である。

（新橋アスレチック倶楽部　Wikipedia 掲載画像）

幼少期

一高、三高の野球熱におされるように、1885（明治 18）年に慶応大学に野球チームができ、それから遅れること 16 年の 1901（明治 34）年に早稲田大学に野球部が誕生する。そして 1903（明治 36）年に慶応と早稲田の対抗戦が始まることになる。現在の東京六大学野球の第一歩がここに踏み出されたのである。

ところで、第一高等学校が創立された 1886（明治 19）年 12 月 1 日、茨城県東茨城郡大場村（現水戸市）に将来の日本野球界の発展に大きく貢献する人物が生まれた。

飛田忠順（後、穂洲と名乗る）氏である。

大場村の村長で豪農であった父忠兵衛と母やすのもと姉二人に続く長男忠と四つ違いで誕生する。

飛田家は前領主佐竹の一族であった。

佐竹氏は甲斐源氏の一族と同じく源頼義の子で源義家の弟の源義光の子孫である義光流源氏の一族である。佐竹氏の初代当主については、新羅三郎義光の

子の源義業とする説と、義業の子源昌義とする説があるが、昌義が常陸国久慈郡佐竹郷（現在の茨城県常陸太田市稲木町周辺、旧佐竹村）に住み地名にちなんで佐竹を名乗ったことから昌義が初代当主とする説が一般的である。

戦国末期、「鬼義重」と異名をとる名将であった佐竹氏第 18 第当主義重は常陸の大半を支配下に置くことに成功し、戦国大名に飛躍することになる。義重は織田信長とよしみを通じその後の豊臣秀吉と友好同盟を結ぶなど着実に実力をあげ徳川、毛利、上杉、前田、島津と並ぶ六大名の一つに数えられたが、関ケ原の戦いの際、義重の子義宣ははせ参じることなく在国のまま観望するという中立的立場をとったため、突如出羽国への国替えを命じられたのである。

一族である飛田家も出羽国へお供することも考えられたが、飛田家は残って帰農し、水戸藩の米倉である水府城南の地大場に腰をすえることになったのである。

歴史に「もし」はないが、この時、飛田家が佐竹について出羽国へ移住していれば今日の学生野球はどんな形になっていたことだろう。

大場村で生を受け、すくすくと育っていった忠順は 1897（明治 30）年大場小学校尋常科 4 年を卒業し、高等科 1 年生に進学するが、生徒数が急増し、中学進学に不利と考え翌年隣村の大洗高等小学校に転校する。

大洗で忠順の運命を決定づける出会いがあった。それが 9 人で行う正規のベースボールである。その当時を本人はこう語っている。

「私はこの大洗小学の校庭で本式の野球を習った。それまでの私は、ポジションの正式の呼び方すら知らなかった。もっとも三角ベースにはその必要もないわけであった。そのころ大洗小学の野球は那珂湊小学や、水戸の小学に並んで有力であり、しばしば水戸や那珂湊と野球試合を行っていた。－中略―私は転校まもなく見出されて仲間に加えられ、捕手や三塁手をあてがわれて練習させられた。同級生中に片桐喜兵衛とか渡辺晋とか優秀な選手があり、捕手の片桐はキャプテンで人物技量とももっともすぐれており、このひとに捕球を仕込まれた。－中略―その時代の野球は大方素手であったが片桐だけは小さなミットを持っていた。もうそのころは既に捕手のデレクト・キャッチがはじまっており、折々大洗の郵便局に勤めていた村田某という水戸中学の投手だった人がコーチにきてピッチャーをしてくれる。この村田さんは有名な豪球で、十間（18.81m）の距離から一寸板を割ったという評判で水戸中学時代いずれもこの人の捕手になるのをいやがったとさえいわれていた。さすが少年名捕手片桐でも村田さんが、ピッチャーズ・ボックスに立つと二間ほど下がってワン・バウンドで捉える姿勢をとった。―中略―ある日村田さんがやってきてピッチャーズ・ボックスに立つと片桐は手にしていたミットをとって私に渡し、私にとってみろという。私は言下にミットをはめると打者の直後にかがみ込んだ。それを見た村田さんは「後ろに下がれ」と手真似をしたが、私が下がろうとしないので、再び球を握りしめさっと投げ出した。小さいミットは私の手をふりもぎって飛び出しそうにしたが、私はしっかりその球をおさえた。村田さんは不安そうになお、5，6 球投げ続けたが、やがてホームベースの方へ歩み寄り私のすぼめた肩をかるくたたいて、「坊、うまく捕らえるな、しっかりやれよ」とにっこり笑った。＝中略―何がきっかけになるものかわからないが、これから私は認められて大洗小学の選手として認められることになった。」

（神門兼之著　「球聖飛田穂洲伝」より）

（飛田穂洲氏　Wikipedia 掲載画像）

水戸一高時代

2020 年 12 月 13 日、六大学野球秋季リーグを制した早稲田大学野球部の小宮山悟監督が、茨城県立水戸第一高等学校（以下、水戸一高）野球部を指導するために訪問した際、まず初めに、水戸一高のグラウンドを見下ろす急坂の上に設けられた飛田穂洲（すいしゅう）氏の胸像に向かって深々と一礼を行った。

水戸一高は、1878(明治 1)年「茨城師範学校予備学

科」として開校され、1880（明治 13）年に「茨城中学」として師範学校から独立。その後、「茨城第一中学校」、「茨城県尋常中学校」、「茨城中学校」、「茨城県中学校」、「茨城県立水戸中学校」と改称を続け、1948（昭和 23）年新制高校「茨城県立水戸第一高等学校」として発足した県内最古の歴史をもつ高等学校である。

大洗小学校を卒業した飛田忠順（後、穂洲）は 1902（明治 35）年にこの水戸中学（現　水戸一高）に入学する。水戸中学は文武両道が校是で優秀な学生を育成し、多くの卒業生が後に大学や政財界で活躍している。また、大相撲第 19 代常陸山谷右エ門を筆頭に、菊地揚二（柔道家）や米山弘（競泳選手、1928 年アムステルダムオリンピック銀メダリスト）などスポーツ界でも有名選手を生み出している。しかし、何と言っても水戸中、水戸一高で注目しなければならないのが、多くの野球人を輩出し、後世の日本野球界に多大な足跡を残すとともに影響を及ぼしたことであろう。

「石井連蔵」の名前を聞いて、ピンときた方はかなりの大学野球通と言ってもよいだろう。石井連蔵氏は冒頭に挙げた小宮山悟現早稲田大学野球部監督の恩師である。

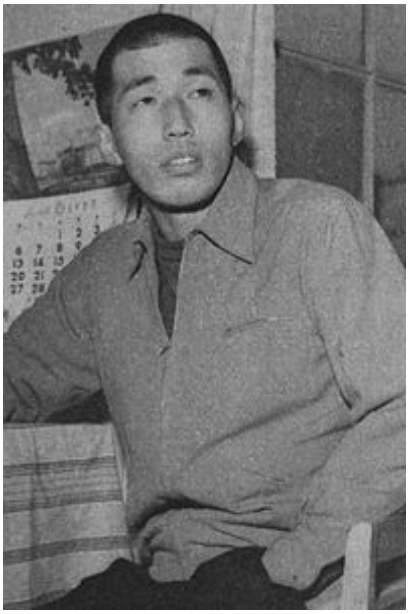
石井連蔵氏は、水戸一校でエースとして活躍し、1951（昭和 26）年に早稲田大学に進学。野球部の門をたたく。大学 2 年生からエースとして豪速球のストレートと大きく曲がるカーブを武器に大活躍。東京六大学野球リーグで 3 度の優勝を演じる立役者となった。卒業後は社会人野球の日本鋼管に進み野球を続け、1957（昭和 32）年母校早稲田大学野球部のコーチに就任。翌年の 1958(昭和 33)年、若干 25 歳の若さで第 9 代監督となる。石井氏は、監督就任後、同郷で水戸中学の先輩であり、また早稲田大学野球部でも先輩となる飛田穂洲氏(以下穂洲とする)から受け継いだ精神野球を真骨頂として猛練習を野球部員に課していく。その結果、就任後僅か 3 シーズンでチームを大学選手権優勝に導く手腕を発揮した。「鬼の連蔵」と呼ばれた石井氏は、1957（昭和 32）年から 1963（昭和 38）年までの前期と、1988（昭和 63）年から 1994（平成６）年までの後期の 2 度監督に就任している。

後期の監督時代に現監督の小宮山悟氏は選手として指導を受けているのである。

2020 年秋季リーグで 10 シーズンぶりに優勝を達成し、試合後のインタビューで恩師の野球殿堂入りと同じ年に優勝できたことに話が及ぶと、感極まって声を震わせ涙を流した姿は記憶に新しい。

さて、石井連蔵氏が「精神野球」を受け継いだ穂洲は、先述したように大洗小学校卒業後水戸中学（現水戸一高）に入学する。1901（明治 34）年のことである。

穂洲は大洗小学校で野球の才能を開花させるわけだが、水戸中学に入学したばかりの頃は野球部に入部することをすぐに決断できなかった。というのも、父忠兵衛が大の野球嫌いで公然と野球をやれる環境になかったからだ。穂洲は父忠兵衛が「なぜ野球が嫌いなのかは判然としないが、夷狄（いてき）のわざという思想的のものから来たのではなかろうか」と語っている。



（早稲田時代の石井連蔵氏　Wikipedia 掲載画像）

やりたくてもやってよいのか悩みに悩む穂洲。そんな彼が正式に野球部への入部を決心させたのは、ほかでもない。野球部の試合を見学したことがきっかけだった。

それまで水戸中学野球部と言えば、泣く子も黙る勢いのチームで向かうところ敵なしの状態で全戦全勝。「茨城に水戸中あり」とはこのことだった。

その野球部が、分校から独立して間もない下妻中学と試合を行うというのだ。試合会場は佐竹城跡に作られたグラウンド。

下妻中学野球部は、全戦全勝の水戸中学に厚く礼して挑戦してきたのであるが、水戸中学は 5 対 1 と思わぬ惨敗。関東平野無敵の水戸中学野球部が負けを喫したのである。

何が起こったのか？

下妻中学のコーチは長塚順次郎。

順次郎は、正岡子規の弟子で歌人・小説家で、農民文学の先駆けとなった代表作「土」の著者長塚節（茨城尋常中学校の時代に中途退学）の年子の弟である。水戸中学時代に野球部に所属していた順次郎は水戸中学を卒業後一高（現　東京大学教養学部）に進学。一高でも野球部に所属し、最新の野球術を学んでいる。

順次郎は一高に入学できるぐらいの学力優秀者で

あったが、それ以上に野球に打ち込んでいた。彼にはこんな逸話が残されている。

「彼の敗れた小倉服のポケットには、年がら年中ボールが呑まれていた。霰はおろか校庭銀世界の雪の中でも、彼は必ずキャッチ・ボールをした。寒風にさいなまれる彼の手はヒビ、アカギレに血を吹いて、ボールはたちまち血染めになる。相手するものが不気味になって、いいかげん逃げてしまうと、また別な相手を探すという熱心さであった。」

これは余談だが、順次郎は 1904(明治 34)年、「魔球術」と題した、野球解説書を発行している。

長塚順次郎が母校水戸中ではなく、新参の下妻中学のコーチを引き受けたのには理由があった。先述したごとく、水戸中野球部は関東平野に敵なしの実力を確かに持っていた。現に、下妻中学と対戦する直前には宇都宮中と対戦し 2 勝 1 敗。負けなしであった。順次郎が気に入らなかったのは、その強さゆえに他校はもとよりあたり構わず野球部員が威張りかえるようになったことである。

「驕る平家は久しからず」

惰眠の夢を覚ましてやろうと、あえて弟分の下妻中学を鍛えて慢心する態度を改めさせてやろうと企てたわけである。母校愛だ。

その戦略は見事的中。その当時、勝者には多少の商品が手渡されるのが慣例で、その日は白棒縞の袴地一反ずつが下妻中学野球部員に配られた。意気揚々と佐竹城跡のグラウンドを引き上げる下妻中学部員。それを奥歯をかみしめながら無念の涙を流して見送った穂洲は、そのとき心に誓ったという。

「下妻復讐」

この瞬間「学生野球の父」飛田穂洲が誕生したのである。

この日から穂洲は、血の滲むような練習を始める。彼はその当時を振り返ってこう語っている。

「私は真剣に練習した。玄関で靴の紐を解きながら眠ったことが幾度あったかしれない。器用でないものが人並になろうとするには人知れぬ苦労がある。不倶戴天の仇を討つ気概というものはどんなものであるか、体験がなくては語れない。けれども私はこの練習を思い出すたびに、それらがおぼろげながらわかるような気がする。ボールの姿が目に映らなくなるまで練習した。」

この言葉を聞いて、先に挙げた石井連蔵氏の逸話を思い出した。

「千本ノック」

「ノックを逃げた選手を追いかけノックするうちにグラウンドを一周してしまった」

「日が沈んでもボールに石灰をまぶしてノックを続けた」

閑話休題。

穂洲のこの猛練習の日々が、「精神野球」を根づかせたと言っても言い過ぎではなかろう。

「下妻復讐」の結末はいかに。

何度か下妻中学との対戦の機会はあったが、雨天に阻まれたり、どうしたことか何度も対戦を願うが一度も応じない。

その後、下妻中学が修学旅行の最中、郁文館（1889 年開校、私立学校）と戦い敗戦したことを聞きつける。そこで郁文館と対戦し、見事勝ちをおさめて下妻中学にも勝ったことにしようと東京行きを決行する。

試合中には水戸からでてきた田舎者に負けてはならずと、郁文館の応援席では日本刀を振りかざすなどすったもんだしたが、試合は終了。9 対 5 で勝利をつかむ。

郁文館を撃破した水戸中学野球部は、翌日三田台に押し寄せて、慶応普通部に勝負を申し込んだ。慶応側は快諾してくれたが、試合当日になり、相手選手が慶応普通部の選手ではなく、正式な慶応の選手達である。言ってみれば、中学生と大学生が対戦するようなもので「これでは」と抗議をするが慶応側は聞き入れてくれない。仕方なく試合をするが結果は火を見るより明らか。

15 対 0 の大敗。水戸中学有史以来の無残な敗戦に男泣きに泣いてしまった。

まだまだ穂洲が選手時代の試合風景について紹介したいところだが、いずれの機会にしよう。

穂洲が水戸中学 4 年のとき、野球部主将になり「水戸中学の黄金時代」を築き上げたわけだが、いよいよ野球部を後輩にあずけ卒業しなければならない時期を迎えることになる。

卒業期が近づいた頃の穂洲の様子を本人に語ってもらおう。恩師北岡吉康野球部長との対話である。当時が目に浮かぶようだ。

「きさまが卒業して弱くなるのは困るからもう1年残ったらどうだ。きさまなぞ上の学校なんかに行かなくともいいだろう」

「先生もうたくさんですよ、私は卒業します」

「でもきさま三角で落第するよ」

「そんなことがあるものですか」

「いやたぶん落第点だろう」

穂洲曰く

先生は数学の受持教師で、厳格な人で有名。どんなに可愛がっても落第させるときは容赦ない。当時、水戸中では一科目でも 50 点以下だと落第であった。苦手な数学。先生もダメという。いささか不安。

結果は・・・・。
「私は無事水戸中を卒業した」

いよいよ早稲田大学に入学。新たなそして歴史的な人生が幕を開ける。

早稲田大学時代

水戸中を無事に卒業した飛田穂洲は早稲田大学入学のため上京する。当時、野球に対する偏見は容赦なく、全ての人が反対論者、教育者からは野球に興じるものはまるで不良少年のごとく扱われる始末。当然ながら穂洲の父忠兵衛も大学に行ってまで野球を続けるのは猛反対であった。

父の不承知を押し切ってまで早稲田進学を貫いた穂洲。恩師北岡吉康や水戸中野球部の仲間に別れを告げ、練習に汗した佐竹城址のグラウンドをあとに汽車に乗り込んだ。

本人は車窓を眺めながら「一種いうべからざる寂しさを感じた」と後に語っている。

ときに 1907（明治 40）年のことである。

この年は、早慶試合が中止された直後（明治 39 年に中断）であった。当時の野球界は、ようやく一高の独壇場を離れて慶応早稲田の対立時代が現出し始めており、学生間に限ってではあるが対決姿勢の熱量は沸騰寸前であった。ついに、最悪の事態が起こった。

慶大・綱町グラウンド、早大・戸塚グラウンドで行われていた早慶戦。

1906（明治 39）年 10 月 28 日、戸塚グラウンドで行われた早慶 1 回戦は慶大が 2 対 1 で勝利。試合終了後、慶大応援団が大隈重信邸の門前で万歳を三唱。その様子を早大の弥次将軍として知られる初代応援団長・吉岡信敬は以下のように語っている。

「慶応応援隊の喜びようは全く有頂天だった。誰彼の差別なく、悦し紛れに地団駄踏んで踊り出す。彼らは手に手に小旗を打ち振りながら、運動場から出て道すがら大隈伯邸の門前まで来ると、凱歌の声は一際高く、

『慶応万歳万歳』

と連呼しているうちはまだよかったが、次に無礼千万にも、

『大隈伯顔色ありや』

『ざまあ見ろ！大隈！』

などと怒号する。この光景を目撃した早大学生はいずれも切歯してくやしがった」

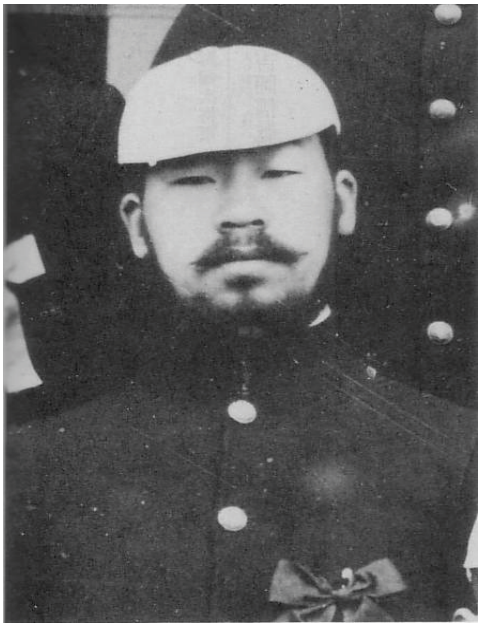
2 回戦は慶大の綱町グラウンドで行われ、今度は早大が雪辱。3 対 0 で勝利を勝ち取った。すると、早大応援団は三田キャンパス内にある福沢諭吉邸まで突き進んで万歳を絶唱したのである。

「早稲田万歳！慶応ざまあ見ろ！」

一触即発の状態とはこのことである。

いよいよ決勝戦となる 3 回戦。行われれば如何なる騒動が巻き起こるか・・・。

慶大の応援隊長・谷井一作は早慶戦中止前後のありさまを以下に語っている。



（吉岡信敬氏　Wikipedia 掲載画像）

「試合の日が迫るとともに両校の興奮は、いやが上にも高まり、決勝戦の当日には、早稲田は芝園橋の原に集合し、吉岡弥次将軍が馬に乗って乗り込むのだという報告まで入ってきた。/私達はこれに対抗すべく、前夜から山上の講堂や綱町の道場に泊まり込み、翌朝早くからグラウンドを占領する計画を立てた。我々は又試合後の乱闘を予想し、万一の場合を覚悟して下に着る柔道着の稽古着を清潔に洗って待ちかまえた」

真っ白い柔道着。まるで死に装束である。

慶応応援隊の覚悟のすさまじさが伺える。

当然、両大学当局はこのような不穏な事態を看過するわけにはいかない。11 月 10 日に予定されていた 3 回戦は中止。この日を境に早慶戦は 19 年後の 1925(大正 14)年 10 月 19 日まで再開されることはないのである。

穂洲の話に戻そう。

上野駅に降り立った穂洲の装いは、これまで着用して八ツ口の開いた着物ではなく、東京風に筒袖にした紺絣の着物に黒い袴を着て、風呂敷包を下げ、蝙蝠傘を握りしめていた。

右左と人波に目を凝らして探していたのは、迎えに来てくれるはずの山脇正治である。

無事に出会えた山脇正治は旧制早稲田中学出身で、早稲田大学野球部創設者のひとり。1905(明治 38)年の早稲田大学野球部米国初遠征のメンバーでもあり、なにより早慶戦のスター選手として有名であった。その山脇の装いはというと、小倉の袴に白ズック靴で垢抜けた大都会の大学生スタイルであった。

野球部員の山脇正治が迎えに来ているということは、水戸中の野球部長北岡吉康が早稲田大学野球部に事前に知らせていたのか、それとも穂洲本人が伝えていたのかは定かではないにしろ、穂洲が早稲田大学で野球部に入部を決めていたのは確かであろう。

さて、山脇に連れられて下宿先に向かうことになった穂洲。なにせ田舎育ちである。大都会の喧騒を横目に市電に乗ることになった。ここで珍事が起きる。

松住町（現；外神田二丁目）で降り、飯田橋方面行の電車に乗り換える時のことだ。乗りなれた山脇は走りだした電車にヒラリと飛び乗り「早く」と声をかけ手招きをする。しかし、穂洲はタイミングがわからずマゴマゴしているうちに電車は速度を上げ始めた。

慌てふためいた穂洲は思い切り飛び込んだのはよかったが、速度のあがる車内でバランスを崩し車掌台に倒れ掛かったと同時に、手に持った蝙蝠傘で車掌の横腹を突きの一本のごとくブスリと突き刺してしまった。それほど尖った先っぽではなかったので車掌に怪我はなかったが、不意をくらった車掌が激怒したのは当然のこと。

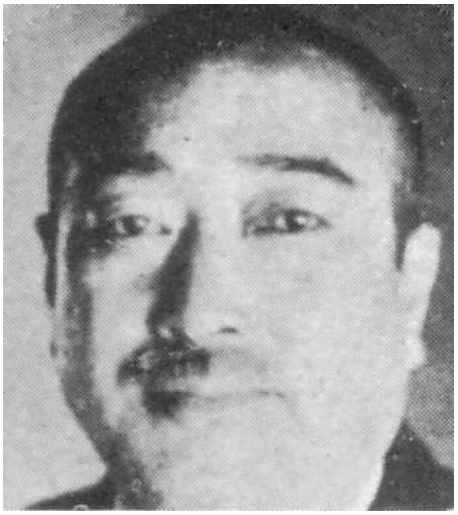
「洋傘をもって車掌台に突貫されてたまるものか、田舎者」

一言もでない穂洲の横で「田舎者」と吐き捨てた車掌の言葉に、先輩山脇は「走っているのになぜ車を止めなかった」「田舎者といった失言を取り消せ。さもなければ許さん」とたたみかけ、この場を見事に落ち着かせた。

小さくなっている穂洲と胸を張り主張する山脇の姿が、同時の世相を映し出しているようで微笑ましい。

そんなこんなで喜久井町にある素人下宿「小駒」にようやく到着。そこにはテニス部の重鎮針重敬喜が待っていた。しばらくの同宿である。

ちなみに、同居人となる針重敬喜は米沢中学（現・山形県立米沢興譲館高等学校）出身で、1903（明治 36）年早稲田大学英文科に入学。庭球部に入部し、本格的にテニスを始める。卒業後は読売新聞、東京日日新聞を経て、押川春浪に誘われて飛田穂洲と共に武侠世界社に入社し、押川死後は実質上の社主となる人物である。



（針重敬喜氏　Wikipedia 掲載画像）

無事宿に着いた穂洲は、翌日、山脇の案内で初めて早稲田大学の正門をくぐった。左手に 1989（明治 22）年に落成した赤レンガで 2 階建ての大講堂が見える。ふたりが中央広場の芝生の辺りまで歩いたとき（その時はまだこの広場には何もなかったが、穂洲が入学した年の 10 月 20 日に創立者大隈重信侯爵の銅像が建つ）、前方から中年の紳士が静かに歩いてくる。山脇はすぐに帽子をとり軽く会釈をした。紳士はにこやかに二人に近づいてきた。

「先生、これが水戸中の飛田です」

穂洲はとっさに頭を下げて一礼をした。

その紳士こそ「日本野球の父」と呼ばれる安部磯雄教授その人であった。

福岡県福岡市に生まれ、地元の私塾向陽義塾（現在の福岡県立修猷館高等学校の源流のひとつ）に入門後、同志社英学校（現・同志社大学）に入学。その後、ハーバード神学校やベルリン大学を卒業し帰国後、同志社大学教授を経て、1899（明治 22）年東京専門学校（現・早稲田大学）の講師となり、1907（明治 40）年教授となる。日本社会主義運動の先駆者であると同時に、早稲田大学野球部の誕生に尽力し、1902（明治 35）年から体育部長として、野球部のみならず、早稲田大学体育全般の面倒をみることになる。しかし、安部磯雄氏と早稲田大学野球部について決して忘れてはならないのが、先述した野球部の米国初遠征である。この遠征は、日本の野球の発展に大きな影響を与えることになる。

その安部教授に上京 2 日にして出会うことからして飛田穂洲の運命が垣間見えるようである。

（安部磯雄氏　Wikipedia 掲載画像）

初めての早稲田大学訪問から数日後、再度山脇からの誘いを穂洲は受ける。

一高（東京大学教養学部、千葉大学医学部及び同薬学部の前身）対三高（京都大学人間学部及び岡山大学医学部の前身）の定期戦を観戦するのだという。同じ野球部部員押川清も誘って出かけて行った。

穂洲にとっては大学入学後初めての大試合である。一高はやや勢力を衰えさせたとはいえ、天下の一高でならした野球の名門校であり、また、この日（明治 40 年 4 月 6 日）から 8 日後に早稲田大学野球部は三高と戸塚グラウンドで対戦することになっており、その偵察も兼ねているという。興味の尽きない一戦である。

場所は、向ヶ丘の一高グランド。

グラウンド正面入口には大きな注意書きが張られている。

「洋服または袴着用のこと」

グラウンドはすでに満員状態。当時は、どこの試合会場でも各校の選手に対して選手席と呼ばれる特別席が設けられていた。山脇・押川の二人は当然だが無事通過。

ここでひと悶着が起こってしまう。

穂洲が二人の後を追って入場しようとすると、一高の委員から入場を拒まれて押し返されてしまったのだ。

その様子を振り返って見た山脇が、「おい君、入れてもらはなくちゃ困る。早稲田の選手なんだ」というと、一高側は「なんていうんです？」と言い返されて、困った山脇は「なんといったっていいじゃないか。新しい選手なんだから、通してくれたまえ」

山脇正治といえば早慶戦の花形選手。一高の委員が知らないわけがない。山脇のこの一言で穂洲はなんとかパスして座席についた。

見回すと一高名物の桜が周囲を囲んで満開に咲いている。スタンドは学生で埋まり、場所のない者は桜の木によじ登って見学している。試合が白熱する度に枝の上で激しく身体を揺するため桜の花びらが舞い落ちる。

試合は 9 対 4 で三高の勝利。三高が 7 回に一挙 6 点を入れたのが勝因である。満員の観客は一喜一憂。大歓声に包まれる観客席で、なぜか穂洲は野球に対する情熱が湧いてこない自分を感じていた。

唐突だがここで押川春浪（本名方存 1876 年 3 月 21 日―2914 年 11 月 16 日）について若干触れておく。

押川春浪は、日本の冒険小説家。代表作「海底軍艦」で作家デビューする。

彼の最終学歴は東京専門学校（現；早稲田大学）で、弟は穂洲とともにこの一高対三高戦を視察した早稲田大学野球部員の押川清である。

（押川春浪氏　Wikipedia 掲載画像）

穂洲は、押川春浪を保証人として入学許可にはなったものの、まだ野球部員としてグラウンドに出てはいなかった。

しかし、1906（明治 39）年 4 月 11 日のことだ。突然押川清が穂洲を訪ね「今日、横浜の外人チームと試合をするのだが、野球部のメンバーが病気に罹り、人数が足りないのですぐに来てくれ」と強引に連れ出した。

当時の早稲田大学野球部は試合前日の練習は休みで、試合当日は午前 10 時頃からバッティング練習のみを行うことが慣例だった。

その練習時間を利用して押川清は穂洲を誘いに来たのだ。試合直前にグラウンドに到着した穂洲は押川清と共に野球部専用のトタン屋根のきわめて粗末な

倉庫で、試合用のユニフォームを着ることになる。まだ正式に入部していない者が正式のユニフォームを着るとはいささか気が引けたが、手渡されたユニフォームを静かに眺め、ゆっくりと袖を通していった。

ズボンは綿入れの重たい刺子（さしこ）で、帽子には二本のラインが入っている。上着は本ネルである。これまで来ていた葛城（かつらぎ）とは見た目はもとより着心地も雲泥の差だ。それ以上に興奮したのがスパイク靴を履けたことである。もちろん生まれて初めてのこと。これまでは通常の練習では素足で、試合のときだけ足袋をはいていた穂洲。輸入されたばかりの新しいスパイク付き靴を履けるとは夢にも思わなかった。

（押川清氏　Wikipedia 掲載画像）

控えの選手としてベンチの隅に座って待機する新人の穂洲だが、誰も彼を気遣うものなどいない。まして相手チームの外人選手が声をかけることもない。穂洲はひたすら無言でゲームの行方を見入るだけである。

試合中になんらの事故もなく、12 対 2 と早稲田の大勝。出番はなかったものの穂洲にとってユニフォームを着てベンチに入れたことは将来を決める貴重な経験であったことは間違いない。

それから約 2 週間後、野球部の新人テストを兼ねた練習試合が行われた。

その当時も、現在と同様、メンバーとして登録されるのは容易なことではなかっただけでなく優秀な部員を集めることも極めて難しい状況であった。当時は情報網が充実していたわけではなく、どこの中学のどんな選手が早稲田に入学してきているかなどは皆目わからない。

毎春新入生で賑わう頃に、野球部控室前に「希望者は何月何日何時グラウンドへ参集すべし」と書かれた「新部員募集」の紙が貼り出された。

穂洲も押川清のすすめでグラウンドに足を運んだひとりである。参加人数は 15，6 名のなかで穂洲の目を引いた二人の選手がいた。

各選手とも思い思いのユニフォームを着ていたが、そのなかでもひときわ目立つ奇抜な装いの者がいた。黒いチャンチャンコの上着に、同色のサルマタ（ランニングパンツのようなもの）をはいたまるで陸上選手のような色黒の小男がそのひとりである。鹿児島生まれで、北海道に移り札幌中学で選手となった伊勢田剛である。

もうひとりは、キャッチャーとして登録された眼鏡をかけた好男子だ。二塁送球モーションが敏捷で、球も速い。関西学院中学から明治学院を出た松田捨吉だ。

穂洲は三塁手として出場した。

練習試合の翌日、再び練習に参加した者は、昨日の新人テストで自分の実力を見限り野球を諦めたのか 4，5 人しかいなかった。練習に参加したメンバーには、穂洲の外に先に挙げた伊勢田、松田の両選手もいた。偶然だが、三人とも名字に「田」がつき、後に「サン田」と呼ばれ、早稲田大学野球部を引っ張っていく主力メンバーとなっていく。

練習に参加した穂洲は、中学時代まで投手の経験があったことから、投球練習を行っていたのだが、どうにも体力・気力ともに覇気が湧いてこない。中学時代あまりに熱中したために、野球への興味が失われつつあるのは事実であった。いわゆる「燃え尽き症候群」に見舞われているのだろう一向に情熱を燃やすことができない。

そう穂洲は思い込んでいた・・・・。

ある日、投球練習を終え下宿へ帰りついた穂洲は、脚にひどいシビレを感じた。けれども、以前から病気と縁のなかった穂洲は、これまで練習を休んでいて急に始めたからであり、くわえて先述したように野球に対する興味の減退からの精神的なものが原因であるから、それを改善していけばすぐに良くなっていくとひとり納得していた節がある。

しかし、状況は良くならないばかりか、日に日に悪化していくではないか。どうも調子が変である。

勇を鼓して近くの川島医院で診てもらうことにした。息子が旧立教大学野球部に所属していた川島院長は診察の結果、穂洲にこう切り出した。

「性の悪い脚気だ。生命にかかわる。命がおしかったら郷里（くに）に帰って養生することだ・・・。」

「脚気」というのは、ビタミン B_1 欠乏による栄養失調症のひとつで、末梢神経が冒されて、脚がしびれたり、むくんだりする病だ。脚気については 1878（明治

11)年頃、ときの内務卿大久保利通が「本邦一種の風土病にて」と言って、表神保町に病院を建設させた歴史がある。

脚気予防には栄養摂取が重要と考えられている。上京してわずか一カ月とたたないうちに帰郷することはいかにも残念だが一人暮らしを続ければ栄養面の不安は拭えない。やむを得ぬと兄に迎えを頼んで故郷水戸に帰った。

それから三カ月は実家暮らしとなる。

穂洲の脚気について人一倍不安と心配を隠さなかったのが、子煩悩な父忠兵衛であった。それでなくとも穂洲が早稲田で野球をすることを心よく思って居なかった忠兵衛である。二度と東京へ帰さないと予防線を張っていた。

いっぽう穂洲は一日も早く早稲田へ戻りたいとの思いが募るばかり。9月になってようやく全快の宣言を受けた穂洲。

息子穂洲の父への直談判の様子である。

(父)　「貴公、ベースはあきるほどやったべ。いまがええ潮時だ。こんだぁ、田舎のために働くことだ。やりげぇのある仕事をょ・・」

(穂洲)「こんままじゃあ、中羽（中途半端）になりやす。苦学生になってでも、東京さ行ぎやす」

（父）「そんだ覚悟があんだら、よけいなことは言うめぇ。一人でやんだな。半年や一年で、ほうきだした（降参）って、言うんでねぇぞ」

（神門兼之著『球聖飛田穂洲伝』より）

穂洲にとって上京は許されたものの、苦学生になって生活費、学費をどうするかが悩みのタネとなる。

頭に浮かんだ唯一の頼みは、早稲田大学野球部長の安部磯雄先生だ。

翌日、先生宛に手紙を書いて尽力を仰ぐことにした。

数日後、安部先生より直々の返信を受け取る。文面は以下の通り。

「申し出の件承知した。この書が着き次第上京しなさい。」

穂洲はこの内容を伝え、翌日出発することを申し出た。これを聞いた父忠兵衛はあれだけ反対していたにもかかわらず、旅費を渡し「くれぐれも体に気をつけるように。東京がいやになったらいつなんどきでも帰ってこい」とだけ口にした。

父に背き上京する穂洲は本当にすまないと思うと同時に、「今度こそ」との気持ちを強くした。

早稲田に戻ってくる穂洲のために、安部は当時スポーツ情報を手広く扱い、若者に人気のあった雑誌「中学世界」(博文社)の編集者である西村渚山との打ち合わせで穂洲が原稿を執筆できるように取り決め、さらに早稲田大学文学部出身の水谷武（竹紫）が創刊し、安部が主筆であった「運動界」にも寄稿できるように準備をしていた。両者とも穂洲が学費を工面できるようにと原稿料をはずんでくれたのである。

これを機に、穂洲は早稲田大学野球部員として活動できるようになったのは言うまでもない。

安部先生ならびに西村、水谷両氏の厚意に報いるべく穂洲は毎日練習に参加するだけでなく野球の全国への普及を運命づけられたのである。

その年の秋、早稲田大学野球部は、日本最初の渡米メンバーであった押川清、河野安通志、森本繁雄の三元老が卒業し、残る部員は同じく渡米メンバーの獅子内謹一郎、山脇正治の両最古参を中心にわずか 6 名。そこに先に挙げたサン田の伊勢田、松田、穂洲が加入してようやく正式陣営が敷けるありさまで、ずいぶん貧弱な体制でのスタートとなる。

とはいえ、いよいよ穂洲の早稲田大学野球部人生が始まったのである。

穂洲の早稲田野球部員として初陣は、9月下旬に行われた横浜商業戦であった。サン田のひとり松田は指頭を負傷し出場できなかったが、伊勢田は三塁、穂洲は二塁を任された。

穂洲自身は三塁を希望していたのだが、病みあがりで三塁からの一塁への投球がまだ十分でないと判断されてのことであった。中学時代から守り通してきた三塁との決別の瞬間でもあった。

その後、多くの練習試合や一高戦など着実に実力を挙げて来た早稲田大学野球部であるが、その底上げに大きく影響したのが外国勢との試合であることは看過できない。

穂洲らが入部した 2 年後の 1908(明治 41)年、部員数の少なさのため低調気味であった早稲田大学野球部の発展を期したと考えられるが、部長安部磯雄は 9 月にシアトルからワシントン大学を招請した。

話が横道にそれてしまうが、早稲田はワシントン大学との試合でそれまで一般的でなかった入場料を徴収し、その売上金を早稲田大学野球部の本拠地戸塚球場の改修にあてた。

さて、対ワシントン大戦に燃える早稲田はそして穂洲の活躍はいかに・・・・。

1908（明治 48）年 9 月 3 日、シアトルに本部を置くワシントン大学（1861 年設立）の野球チームは、早稲田大学野球部の招へいにより来日する。

それより一カ月前の8月早稲田大学は史上初の入場料徴収のために、野球部の本拠地である戸塚グラウンドの周囲に木柵を巡らし、一塁側に約 4，5 百人を収

容できるベンチを据え付け、三塁側には土手に段々をつけてスタンドを造った。さらに、外野フェンスとスタンドも増設している。見物客がゲームを見やすくするためである。

穂洲はこの大規模増築をこう語っている。

「これを一見したときの野球関係者は、いずれも賛美の声を惜しまず、早稲田選手の多幸なるをうらやんだものであり、われわれ自身また、このグラウンドを持つことを、大いに得意としたものであった。しかも今日の完備したグラウンドに比べるなら、小屋掛けを歌舞伎座の舞台のごとく考えたたぐいにほかならない」（飛田穂洲著「熱球三十年」より）

ワシントン大学野球部の来日は、その後陸続として米国チームが来朝することを見るにつけ、まさに米国大学チーム来征の魁（さきがけ）であったといえよう。

いよいよ米国大学チームと本国で対戦できるとあって、早稲田大学野球部の全部員の熱の入れようは尋常ではなかった。それが災いしたのか、穂洲が練習中に負傷してしまうのである。来日 10 日前のことであった。

「三塁から本塁を突く練習でサブの捕手山口武と激突。山口は麻生中学から入ったばかりだが、一徹者で試合同様熱の入ったプレーであった。ヘッドスライディングした飛田に勢いよくタッチしたが、彼の頭が飛田の右肩に炸裂した。飛田はだらっと下がった右腕を抱えながら接骨院に駆け込むと、全快に一カ月以上かかるという。」（神門兼之著「球聖飛田穂洲伝」より）

全米トップを切ってやって来るワシントン大学を相手に穂洲の抜ける穴は大きい。部員の皆が肩を落としたのは言うまでもない。

柔道初段でマッサージの心得もある穂洲の同居人舟木が荒治療を施すが効き目はない。

9 月 19 日に行われた初戦には穂洲は欠場。試合は 4－2 で敗北。9 月 23 日の 2 回戦も欠場。結果は 6－3 で勝利。10 月 4 日が 3 回戦の予定である。

穂洲はせっかくのワシントン大学戦に1度も出場しないのはいかにも残念。主将山脇に出場させてくれるよう申し出る。

おそらく肩を脱臼しているのでもちろん完治はしていない。右手はようやく頭の位置まで上げられる程度だ。ボールは握れるが、当然投げられない。

選手層が厚ければメンバー入りは不可能であったろうが、左手だけでバットは触れると強い口調で懇願する穂洲の気性の強さに主将山脇はメンバー入りを許可した。

3 回戦の穂洲のプレーである。

（先攻ワシントン大学。後攻め早稲田大学。穂洲はセカンドで出場。）

初打席　相手投手ブラウンのカーブを打てず三振。

4 回表 ワシントン大学 4 点先取。

4 回裏 山脇がヒットで出塁。2 塁に進んだ後、穂洲の 2 塁打で 1 点を返す。

7 回表 再びピンチが訪れる。

ランナー1 塁で 4 番強打者のテーツ。フルスイングだがつまり気味の当たりが2塁をかすめるように右中間に飛ぶ。

ここで穂洲がドラマを起こす。

2 塁手の穂洲がとっさに背走。しかし、グローブを出しても間に合わない。穂洲はとっさに負傷した右手を差し出し、打球をダイレクトにワシッとキャッチ。素手である。1 塁ランナーはヒット性の当たりだけに 2 塁へ猛進。穂洲が 1 塁に投げれば難なくダブルプレーがとれる。しかし、穂洲は投げられない。あくまでも疑投のモーションを繰り返しながらランナーを1塁へ押し返す。穂洲が怪我で投げられないことを知っていればランナーは難なく1塁に引き返せたかもしれないが、当然躊躇しながら 1, 2 塁間を行ったり来たり。そこでショートの伊勢田選手が判断よく穂洲に駆け寄り、ボールを受け取りすぐに 1 塁へ送球。見事ダブルプレーをもぎとった。

善戦むなしく、試合結果は 4－1 で負け。続く第 4 回戦も 5－3 で敗北した。

１勝３敗で終わったワシントン大戦ではあったが、球史に残るものとして先述したように、戸塚グラウンドで行ったすべての試合で史上初の入場料制を導入し、この収益ですべての費用を捻出したことであろう。

その後 10 月 19 日には米国東洋艦隊と歓迎試合を行い 3 勝 1 敗。同日から 24 日までアメリカ太平洋艦隊（東洋艦隊チーム）が来日したのを機に、各艦の野球チームと早慶野球部が親善試合を開催。早慶は 7 勝 1 敗 1 分けの好成績を残す。

さて、この年の最後を飾る外国人チームとの対戦は、11 月 2 日に来日した米国職業人野球団リーチ・オール・アメリカンスター・チームとの 4 回戦であった。

リーチ・オール・アメリカンスター・チームは、米国のスポーツ用具商リーチ商会が、メジャー、マイナー両リーグ選手をピックアップして編成した特別チームである。ちなみに米国の職業人野球団（プロ）が来日したのはこれが初めてである。

1 月 22 日、戸塚グラウンドで早稲田と 1 回戦が行われる。

ここでまた球史に残るひと場面を記しておかなければならない。

当時総長であった大隈重信伯が、史上初めて始球式を行ったのだ。

大隈伯はグラウンドに入場するや否や大声でこう語った。

「この運動場は安部が選手を連れて洋行したとき、

向こうで金をもうけ、野球部が買い入れる算段であったが、うまくいかず、未だ学校のものになっていない。」

安部とは当時早稲田大学運動部長であった安部磯雄のことである。安部氏の苦笑を横目にこれを聞いていた穂洲は後にこう解説する。

「大隈さんがいわれたように、当時のグラウンドは借地で、福田喜太郎その他三、四人の持地だった。それを数年後大学が坪二十二円という安値で買い入れたのである。坪二十二円なら今の野球部は借金しても購入できるのだが、今日あのグラウンドの地価は坪百二、三十円（昭和初年の地価）になっていようからどうにも手をつけられない」（飛田穂洲著「野球生活の思い出」より）

ところで、試合結果はとなると 1 回戦 5－0（この試合で初めてプロと対戦した穂洲だったが、そのレベルの違いに舌を巻き、実力に敬服したと語っている）。2 回戦 3－0（28 日）、3 回戦 13－2(12 月 1 日)、4 回戦 10－0（12 月 3 日）と全敗を喫してしまう。

翌年の 1909(明治 42)年 4 月 10 日、対三高戦でシーズン開幕。9 月 20 日には野球の早慶戦復活を早稲田側が呼びかけるも、10 月になって慶応側が拒否するなど未だ殺伐とした雰囲気が残るなか、穂洲に重い役目が回ってくる。

10 月 26 日、来るべき年に向けて、主将選挙が実施された。最初の投票では山脇が当選。
しかし、1907(明治 40)年から足かけ 3 年間苦難の主将を務めた山脇が辞退を表明。皆はそれは当然のことと納得し、再度選挙が行われた。次に当選したのが穂洲であった。

だが、水戸中学野球部時代に主将を務めた穂洲はその大変さを肌身で感じている。ましてや早稲田大学野球部の主将となればその重責は自分では無理であると固辞したのである。

すると、それを聞いていた安部磯雄氏が部員全員を見渡しながらこう述べた。

「当選した者が、特別の理由もなく、辞退するのはよろしくない。あくまでも断るなら、選手を辞めるがよい。多くの選手の期待を裏切るような行為は男らしくない・・・・・」

穂洲は主将辞退と言っただけで、なぜ選手までやめなければならないのかと、ただただ驚くばかりで納得がいかない。しかし、恩師安部の激烈な権幕に押されては反論する術がない。穂洲はついに引き受けるのである。

新主将が穂洲に決まったことと、穂洲を強引に推薦したことの責任を思ってであろう、安部氏は勤めていた運動部長を辞任し、野球部長に就任した。早稲田大学野球部の礎となる「安部―飛田体制」が誕生したのである。

1910（明治 43）年、新主将としてスタートを切る初戦は 5 月 7 日に行われた学習院戦である。結果は 8－1 の大勝。しかし、穂洲は心の中で真の初戦はこの試合でなく、あくまで 1 週間後に予定されている一高戦がキャプテン穂洲の初舞台と考えていた。

これまで一高には 2 年連続で敗れており、3 度目の敗戦は許されない。早稲田大学野球部を応援してくれるファンも承知はしない。もちろん、学生も黙ってはいないだろう。

2 塁からレフトに回っていた穂洲は、シゴキともいえる猛烈なノックを浴びるように受ける。ライナー性のあたりが左右前後に飛んでくる汗と泥にまみれた主将穂洲の姿を見て他の部員が燃えないわけがない。穂洲は主将としてチームを引っ張る姿を身をもって示したのだ。しかしまたここで悲劇が・・・。

内外野を合わせて行う中継プレーの練習中だった。飛んできたボールを前進して捕球した穂洲は、すぐさま内野へ返球したつもりが、ボールはなぜか後ろへ飛んでいく。捕球した際に右手に衝撃を受けたが夢中であったために異変に気付いていなかった。右手薬指を見ると脱臼して指の腹を破って白い骨が突き出ているではないか。捕球した際指がボールに直撃してしまったのだ。

サブ選手の望月茂雄が指を力任せに引っ張ってなんとか元に戻ったが、当然だが激痛は収まらない。練習終了後、接骨院に向かうが 10 日やそこらで完治するものではない。しかし、穂洲は 2 日休んだだけで練習へ戻った。練習に出なければ試合にも出られない。それでは主将の責任は果たせない。

試合日が近づくにつれ大学学内も興奮と期待で異様な雰囲気が漂ってくる。

対一高戦の結果は 1－0 で辛勝。雪辱を果たすことができた早稲田大学学生も大喜び。

新主将穂洲が率いる早稲田大学野球部は開幕2連勝でなんとかスタートを切った。

穂洲がキャプテンとしてスタートを切った 1910(明治 43)年、早稲田大学野球部部長安部磯雄は二度目の海外遠征を企画する。遠征先はハワイ。史上初の米国遠征を決行してからすでに 5 年が経っていた。

遠征メンバーは部長・安部磯雄、主将・二塁・飛田忠順(穂洲)以下 15 名である。

主将として海外遠征チームを統率するとともに士気を高めていくことを強く決意した穂洲であったが、ひとつの問題がトゲのように胸の内に刺さっていた。

父忠兵衛のことである。

もともと穂洲が大学で野球をすることを快く思っていなかった忠兵衛は、安部部長からの直々の手紙を受けとり、大学で野球をすることを黙認していたくら

いである。今回は、野球をするために海外へ出向こうというのだ。賛成してくれるか否かは誰にもわからない。
穂洲は再度安部部長に手紙を書いてもらうことを願い出て、その手紙を懐に一旦帰郷する。
安部部長からの手紙を開いて目を落とす父。無言である。
翌日、父の返事をもらえないまま、上京する由を伝えた際、初めて口を開いた忠兵衛。
「男らしくやってこい」
そして餞別だといって金包を手渡してくれた。穂洲は感激から涙を流し、ひと時の間父のもとを離れることができなかったという。
父からの許可を得た穂洲を始めとして早稲田大学野球部のメンバーが横浜港を出帆したのは6月22日。
出帆の際には、埠頭の群衆の中からひときわ大きな声で弥次将軍で名を轟かせた吉岡氏が痛快な送別の辞を述べる。それに対して、安部部長が船の上から答辞を送った。湧きかえるような騒ぎ。やがてドラが鳴り、校歌が歌われ、万歳の大合唱。選手一同を乗せた地洋丸はゆっくり動き出した。
メンバーは出帆翌日から上甲板で練習を開始する。ランニング・キャッチボール・バント練習など可能な限り行った。正式なユニフォーム姿で行う彼らの姿を同乗した外国人は興味津々で眺めていた。
7月1日、予定よりも早く午前9時15分にホノルルへ入港。
太平洋の楽園（パラダイス・オブ・ザ・パシフィック）オアフ島が絵を見るように鮮やかに浮かんでいた。埠頭にはハワイ日本中学の生徒が整列しており、新作早稲田野球団歓迎の歌を合唱してくれる。
ハワイの7月は日本を6月末に出発したメンバーにとってはまるで避暑地のようで、グラウンドに出れば灼熱と戦わねばならないが、屋内に入ったり、木陰にいると涼風がそよぎえも言えぬ快感が味わえた。
いよいよ決戦が始まる。
初戦は7月3日。対戦チームはオアフ選抜チームである。試合会場はアスレティック・パーク。
当時のホノルル球界は、オアフ・リーグのプナホ、マリーン（海兵隊）、CAL（中国人）、PAC（ポルトガル人）、JAL(日本人)の5チームがオアフ・リーグを組織していた。選抜チームはこれら5チームからの優秀選手をピックアップしておりホノルル最強だった。
結果は6対2で敗戦。黒星スタートの海外遠征となった早稲田大学野球チームだが、約2ヶ月間のハワイ滞在中25戦し、12勝12敗1引き分けで五分の星を残したのは立派だ。
8月22日東洋汽船の天洋丸でホノルルを発ち、9月3日に横浜港に到着。
帰国後の早稲田大学野球部は休む間もなく外国人チームとの対戦に挑んでいく。大敵シカゴ大学がその相手だ。当時のシカ大学は米国学生球界のトップとして君臨しており相手に不足はない。
しかし、早稲田大学野球部はハワイ遠征での連戦の疲れが抜けきれておらず、主力選手が次々に病気や怪我で離脱。十分な戦力が整わない。だが、そこは気力で勝負と戦いに臨んだが、結果は火を見るより明らかだ。
1戦目は9—2、2戦目5—0、3戦目15－4といずれも大敗。早稲田大学野球部は東京での3連戦を終えたのち大阪毎日新聞社の要請を受けシカゴ大学に帯同して西下、電鉄阪神沿線の香炉園特設グラウンドで対シカゴ大学戦を3試合行った。こちらも結果は悲惨。
1戦目は8—4、2戦目20—0、3戦目12—2でまたもや大敗。
そして・・・。
関西遠征中に知人が危篤との連絡受けた穂洲は、安部部長と同じ汽車に乗って東京へ帰った後、その足で水戸へ戻る予定だ。汽車が新橋駅に着き、安部部長と別れる間際、穂洲は心中をもらす。
「今度の敗戦はすべて僕の責任です」
「自分は今度の責を負うてキャプテンを辞任します。先生から一同によろしくお伝え願います」
静かに聞いていた安部部長は、やがて口を開き、
「とにかく先輩ともよく協議してからにしましょう」
水戸からもどった穂洲に、同僚の小川重吉、伊勢田剛、松田捨吉（いずれもハワイ遠征組）が、「お前ひとりが責任を負うべきではない。我々も非難されて当然だ」と4名揃って選手を引退し、コーチの任に当たることになった。
新たに大井斉が主将となって早稲田大学野球部は新チームとしてスタートすることになる。
1913（大正2）年、穂洲は早稲田大学を卒業。早稲田大学野球部草創期の主力メンバー押川清の兄、押川春浪が1912（明治45）に創刊し、主筆となった「武侠世界」に入社する。春浪は1914(大正3)年に死去。春浪亡き後、盟友中沢臨川が主筆となり武侠世界を発行し続けるが、穂洲はこれを機に武侠世界を退社。読売新聞に転職する。

早稲田大学野球部監督時代

新聞記者として過ごしていた穂洲に思わぬ事態がおこったのは1919(大正8)年のこと。
野球部の先輩、押川清から突然の相談を受ける。浮かない顔をしていた押川に穂洲が「なにかあったので

すか・・・」と問いかけた。

「いや、なに、安部先生から頼まれていた野球部の世話人のことだ・・・」

1911(明治 44)年から野球部を世話していた河野安通志が早稲田を辞めることになり、急遽後継者を探さなければならなくなったとのこと。しかし、血気盛んな若き野球部員とともに体を動かしながらコーチできるのは 34，5 歳からせいぜい 40 歳くらいである。まさに働き盛りの年代だ。結婚もしているだろうし、子供もいるだろう。野球部世話人(当時監督という呼称は無かった)の安月給では到底その生活を支えることはできない。それが現実である。簡単に次の担い手が見つかるわけがない。それを聞いた穂洲は、

「僕にやらせてくれませんか・・・」

先にも記したが、穂洲はシカゴ大学戦で 6 戦全敗して 3 名の同僚とともに選手を引退した。卒業後もその悔しさを忘れはしない。打倒シカゴ大学の思いは消えるどころか日々増すばかりである。しかし、今の自分ではいかんともしがたい。後輩に託して再度挑戦してみたいと常々考えていた。

降ってわいたような今回の話。穂洲は飛びついた。

「君がやってくれるなら、先生も喜んでくれるだろう。しかし、子供二人を抱え、この僅かな給料ではやっていけるなずがない・・」

「やっていけなくても、やります。僕には悲願があるのです・・」

押川はあくまで穂洲の家庭を慮り、とりあえず穂洲の意思は安部部長に伝えるが、まずは家庭内で話し合うことを勧めた。

後日、押川は「安部先生は君が世話人を引き受ける意思があることを聞いて大変満足そうだったよ」と語り、次いで「野球部はすぐに奈良の冬季練習へ出かけるが、君にもできるだけ早く出てきてほしいとのことだ」

それを聞いた穂洲はさすがに驚き、「え！すぐにですか。来季からだと考えていました」と答えると、押川は「通常はそうなるが、決まったのならできるだけ早い方が良いと安部先生はおっしゃっている。」

「ところで、奥さんは承知しているね？」

「・・・・」

「まだなのか、それは困ったな。それが安部先生の耳に入ったら、まずい・・」

「大丈夫です。今夜必ず・・・」

帰宅した穂洲は夕食後火鉢をはさんで妻ひろに向かって、

「今日、大学野球部の世話人に決まった」

妻ひろは「まだベースをやるつもりですか」

驚きとも落胆ともいえぬ表情で「一晩考えさせてください」と部屋を出ていった。

翌朝、朝食を前にひろは、「そんなにベースに執着しなくてもよさそうなものに。どうしてもおやりになるというなら、親子ともども苦労するほかありませんね・・・」

覚悟を決めた表情であった。

いよいよ、穂洲の早稲田大学野球部世話人(監督)の時代が始まったのだ。

しかし、生活は苦しい。読売時代の給料は 70 円(当時)が 20 円減額の 50 円。妻ひろは幼い次男を背負い長男の手を引いてできるだけ安い物をと遠方まで買い出しに出かけ、ガス代、電気代も節約。まさに、妻ひろは早稲田大学野球部の陰の立役者だと言っても過言ではない。妻の苦労を「すまない」と思いつつ穂洲は早稲田大学野球部の発展のため血眼になって選手強化に努めていく。その甲斐あって実力はうなぎのぼり。優秀な選手も次々と輩出していく。

そして 1925(大正 14)年、穂洲は監督として最後のシーズンを迎えることになる。19 年ぶりに早慶戦が復活し、宿敵シカゴ大学が来朝することになっている。

九州、朝鮮遠征を終えて万全の仕上がりを見せるシカゴ大学が東京にやってきた。11 月 9 日、戸塚球場。対シカゴ大戦が行われたのだ。前半は 4－0 で折り返す。またも敗戦かと穂洲の胸に暗雲が広がるが、この日の早稲田は違った。5 回に一挙 5 点を挙げ逆転すると早稲田打線が火を噴いて、結局 10―4 で圧勝。

穂洲の 16 年間の打倒シカゴ大学の執念が実った瞬間だった。

穂洲は勝利を手にした翌日、安部部長はじめ野球部員に決別の辞を述べ、監督を辞任する。肩の荷が下りた穂洲は、家に帰りつくなり一言。

「おい、今日。コーチをやめてきたよ」

球聖飛田穂洲は清々しくグラウンドを去ったのである。

―引用・参考文献―

神門兼之著「球聖飛田穂洲伝」柘植書房新社 2004 年
飛田穂洲著「野球生活の思い出」ベースボール・マガジン社 1986 年
飛田穂洲著「熱球三十年」ベースボール・マガジン社 1986 年「飛田穂洲選集　第二巻」飛田穂洲著ベースボール・マガジン社　1986 年
小関順二著「野球を歩く」草思社 2013 年